

## 2020 年度 神戸市外国語大学 社会人特別選抜 入学試験問題【小論文】

以下の文章は50年以上前に書かれた文章です。今の皆さんの目からは古臭いに見える部分もあるはずですが、それも含めて、この文章を参照しながら、そこに語られている「近代日本」の問題についてのあなたの所見を自由に述べなさい（800字以内）。

日本の近代化という問題は、僕らの衣食住あるいはそれが象徴する精神生活が現在どうなっているかということと切りはなして考えられないでしょう。

僕等にとって、それは自己反省の問題です。僕は外国人がこの問題を論じた言説をあまり好みません。日本人が近代を所有することで、あるいはそれに所有されることで、何を得、何を喪ったか、我々が現在何に苦しみ、何を<sup>ねが</sup>希っているか、そういう内心の問題が他人にわかってたまるかと思えます。

ひとの忠言はきくべきかも知れませんが、しかし僕らが我国の近代について反省すべきことのひとつは、他人の言うことをききすぎたことなのです。

社会の近代化はさまざまな尺度で計られます。政治の領域においては、それは人権の平等化であり、産業においては工業化、思想については自由化、多様化の度合いが、目安になります。しかし僕らにとっては、いまひとつ大きな側面があります。それは外国化ということです。我国の近代化は西洋化のことだというのは大ざっぱすぎるにしても、僕らにとって、近代化とは外国産の事物の採用であることは、身辺を見回してみればわかります。

衣食住をはじめとして、僕らの周囲から、我国に固有のものがむしろ珍しくなっているように、僕らの思考を組みたてる要素も西洋からきたものが主になっています。

自然とか観念というような古くから使われてきた言葉も、西欧系の単語の訳語として使われるのが現状です。

近代という時代の性格そのものが、安定や停滞と反対な、発展あるいは変化を特色としているのかも知れませんが、我国ではそこにさらに風土に異質な借りものという性格が加わってきます。

これは別に我国に限ったことでなく、現代の世界で、ヨーロッパ、アメリカ以外の国はすべて借りものの文化で新しい時代をつくっているといえます。この近代化が世界のどの国々も通らねばならぬ道であるとすれば、我国はそれについて、きわめて意義ふかい先鞭をつけた国でしょう。欧米以外の国で、近代化する能力を最初に実証し、十九世紀のヨーロッパが持っていたほとんど絶対的な力の優越を打破したのは我国です。当時の我国が国際社会で収めた成功が、表面的なものであり、蔭に多くの無理や犠牲を伴っていたにしろ、それがアジアの諸国におよぼした影響は大きかったので、今日の世界をつくりあげるひとつの動力になったといっても過言ではないでしょう。

しかし、そんな風に先駆者であったこと自体が、近代国家の体制が、まがりなりにも、比較的混乱や抵抗が少ない形で採用され、近隣の諸国とちがった地位を、ヨーロッパを中心とする国際社会で占め得たことが、我国の文化の性格をアジア諸国のなかでも孤立したものにしていくかも知れないのです。

（中略）この「外圧」によって定められた国の進路が、国民の生活と内外両面にどんな犠牲を強いたか、その結果がどんな形で現代に伝わっているか、それを考えて見ることは、先人にたいする義務と思われるます。

（中村光夫『日本の近代』1968年、文藝春秋より抜粋）